



爆乳筋肉長身女を
チート道具で
ママにする!!

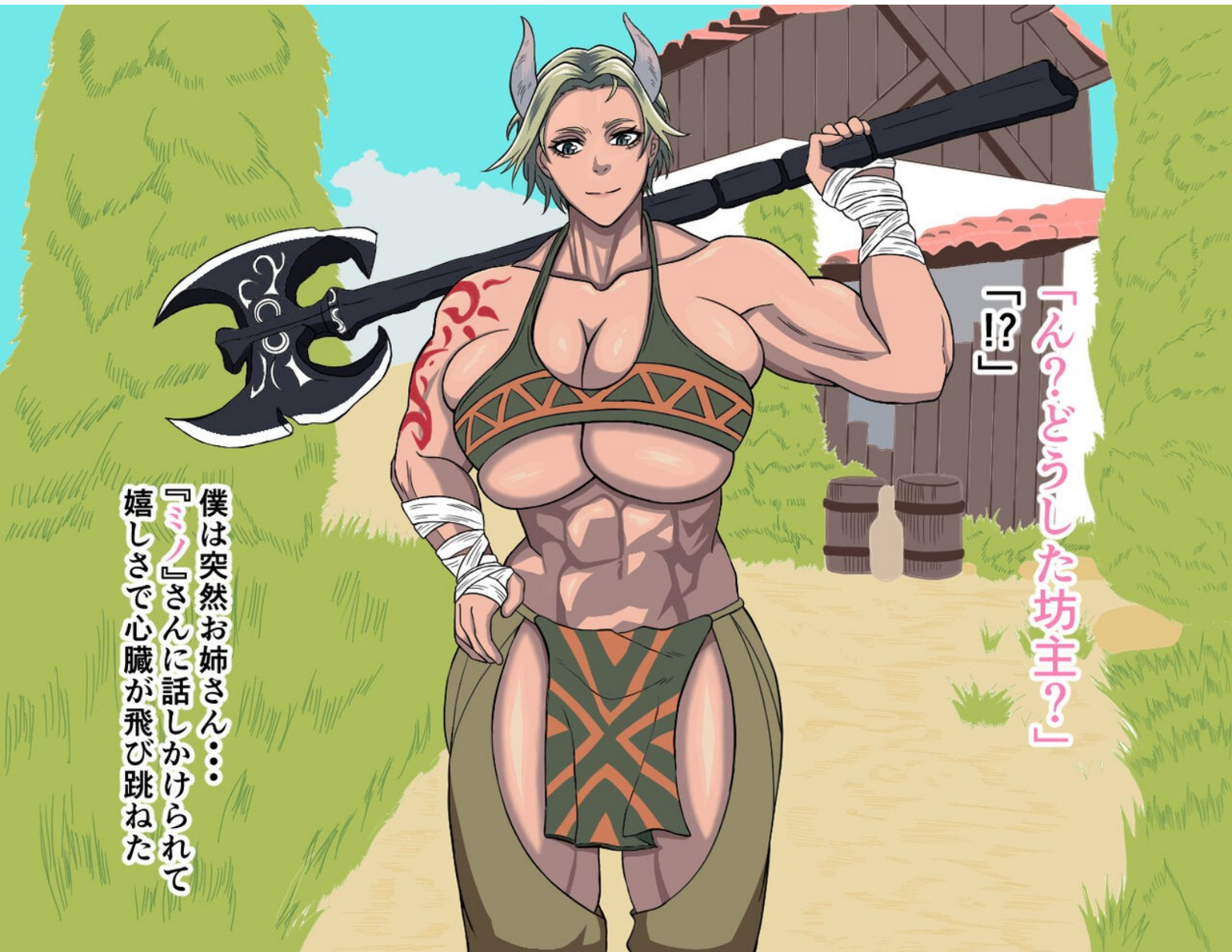
絶倫鬼畜
シヨタに
好き放題される
お姉さん

最近村の外れに越してきた
冒険者のお姉さん

彼女は村の近くの魔物を
駆除するために雇われており、
大斧を軽々振るう姿は
とても頼もしい

その仕事ぶりと、
快活で豪快な性格から、
男女問わず人気がある





「ん?どうした坊主?」

「!」

僕は突然お姉さん……
『ミン』さんに話しかけられて
嬉しさで心臓が飛び跳ねた



「いや……その……美人だと思って……」
僕はドキドキしてしまい、
思わず本音が漏れた。

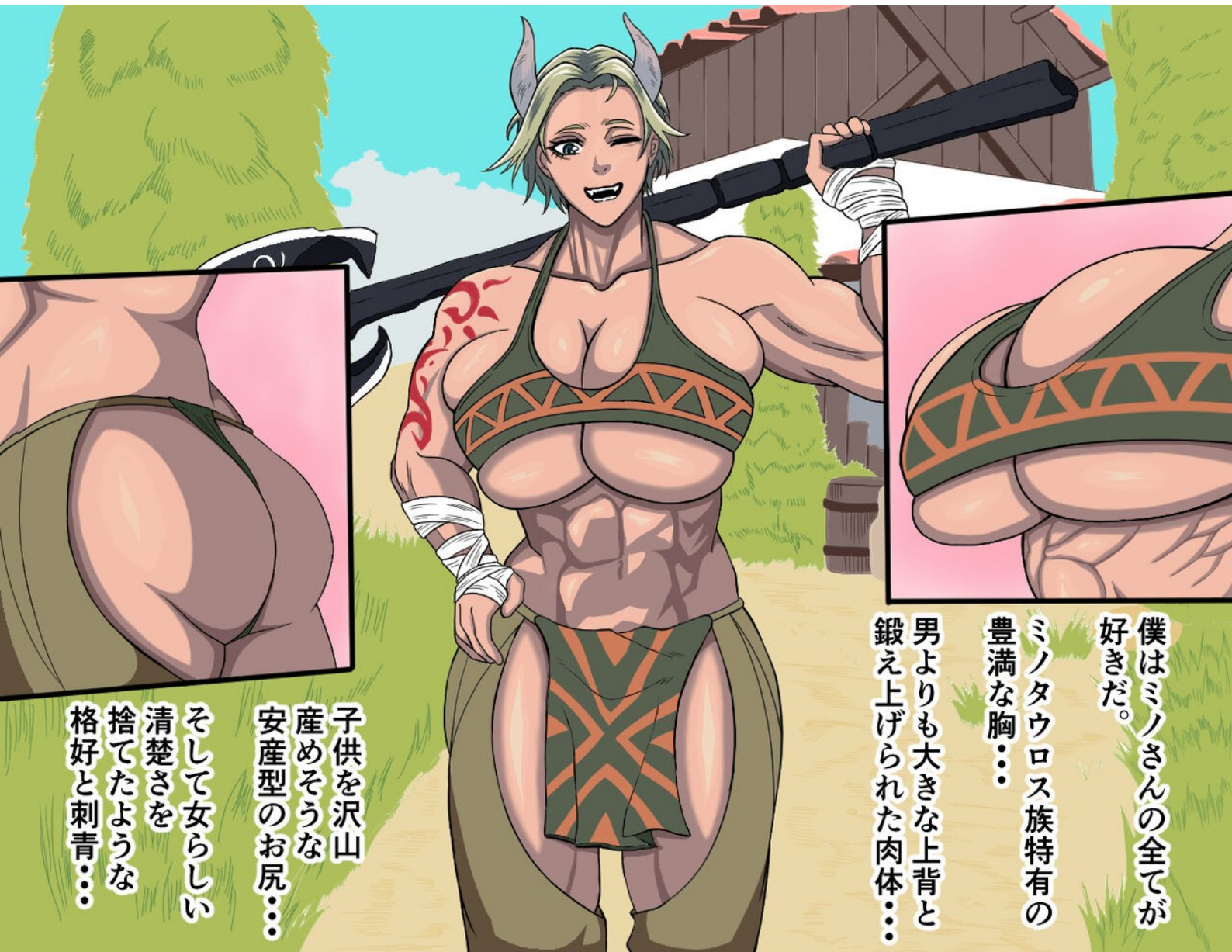
そんな僕にミノさんは
ニヤリと爽やかに笑い、
「ハハ！ガキの癖に見る目あるな
そんじや私の旦那になるか？」
と冗談めかして言った

「なんてな。じゃあまたな」
そう言って立ち去るミノさんを、
僕は内心ドキドキしながら見送った

僕はミノさんが好きだ

村に来たその日から好きだ





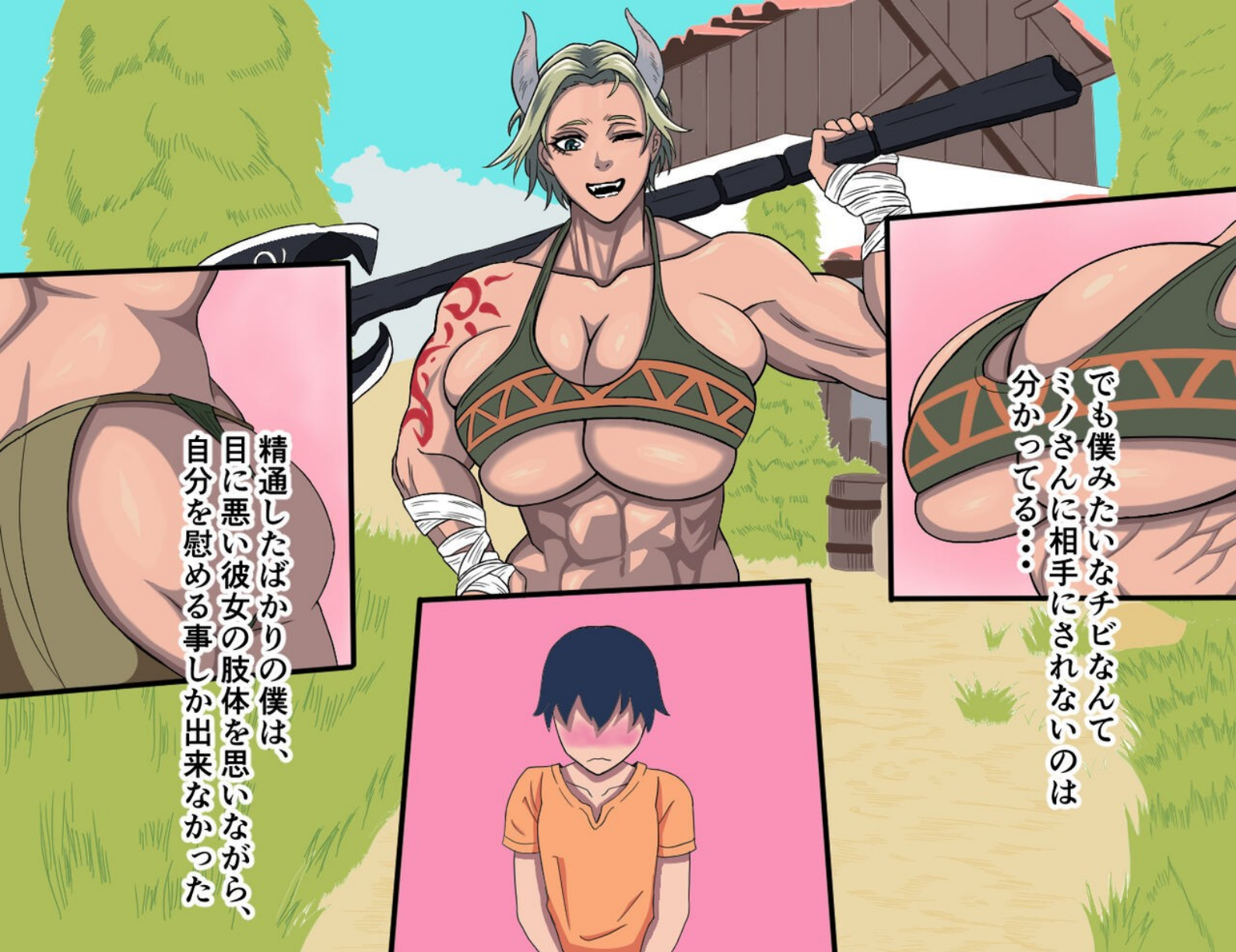
僕はミノさんの全てが
好きだ。

ミノタウロス族特有の
豊満な胸……

男よりも大きな上背と
鍛え上げられた肉体……

子供を沢山
産めそうな
安産型のお尻……

そして女らしい
清楚さを
捨てたような
格好と刺青……



精通したばかりの僕は、
目に悪い彼女の肢体を思いながら、
自分を慰める事しか出来なかった

でも僕みたいなチビなんて
ミノさんに相手にされないのは
分かってる……

『お前に好きな女が出来た時に開けなさる』
ある日死んだジイちゃん言葉の思い出した僕は、
遺品の箱から数々の魔法道具を発見する。

それにはジイちゃんの説明書きが
添えられており、それを読んだ僕は
とても信じられないという気持ちになった。
そして同時にこう思った。

『これがあればミノさんを好き放題犯せる……』

催眠



僕は早速ジイちゃんの
遺品の中から、
『睡姦薬』と呼ばれる薬に
目を付けた。

何でも一度服用すると、
数時間何が起きても
目覚めないらしい。
正直嘘くさい……

でも物は試したと、
僕はそれを混ぜた飲み物を
休憩しているミノさんに渡した

すると一時間後、
彼女は眠気を感じたのか
スヤスヤと眠りについた。



目の前で無防備に眠る
ミノさん……。その姿を見て
薬の効果が本当だと悟った。

『数時間何が起きても目覚めない』

その言葉が頭で反芻される。
僕は生唾を飲むと、
震える手で彼女の服に
手をかける。

目の前にミノさんの
胸があらわになった……。

憧れの人の女性の部分を見て、
僕の理性は焼き切れる。



僕はミノさんの胸を
夢中になって揉みしだいた。
とんでもない柔らかさ…。
手にしっとり張り付く潤った肌…。
指を適度に押し返す肉の弾力…。
その全てがとても心地いい…。

ぴん

きん

おっ

おっぱい！

ミノさんの…！

気持ちいい！！



僕はミノさんの胸にむしゃぶりついた。
いつも男らしくて豪快なミノさん……。
そんな彼女に不釣り合いな程の
母性の塊に甘えまくる。

乳首を舌で舐めながら
鼻で呼吸するたび、
女の人特有の良い匂いと
メス臭さで頭がクラクラする。

すると自然に「ママ」という
言葉が口をついた。

僕はミノさんに肉欲以上の
感情を抱いているのかも……。

ママ！
ママあ！

ママのおっぱい
おいしいよお!!



ミノさんのおっぱいに
ひとしきり甘え尽くした僕は、
彼女をじっくり観察した。

乳首が敏感なのか、
隠れていた乳首は
痛いほど勃起している。

また顔は上気しており、
意識が無いながらも
僕の責めに満足して
いるようだった。

その様子を見て、僕の中の男が
このメスに誘われていると
叫んだ。



僕は性欲の赴くまま
ミノさんの下着を脱がすと、
一番雌の臭いのする場所に
ちんこをあてがった。

ちんこはにゆるんと
ミノさんのマンコに
吸い込まれ、
僕はその気持ち良さに
情けない声が漏れる。

んっ

ヌルヌルしていて
適度に柔らかいのに、
鍛えているからか締め付けが
スゴい……

そんな初めて経験する極上の
感触よりも、ミノさんで童貞を
卒業したという実感に
僕は感動していた。



いつも凜々しいミノさんで
ちんぽをすごしている…。

僕よりも大きくて
強い年上の女性で
筆おろししてる…。

昨日までの僕なら
とても信じられないその事実
僕の腰はさらに速くなった。

フッ！！

フッ！！

目の前では、
僕の腰ふりに合わせて
ミノさんの巨乳が
弧を描いて揺れている。

その光景を見ていると、
まるでミノさんの女性を
支配している様な感覚になる。



そしてすぐに限界が来た。
僕はもつとHしたいので、
必死に腹に力をこめて
射精を我慢する。

んんん♡

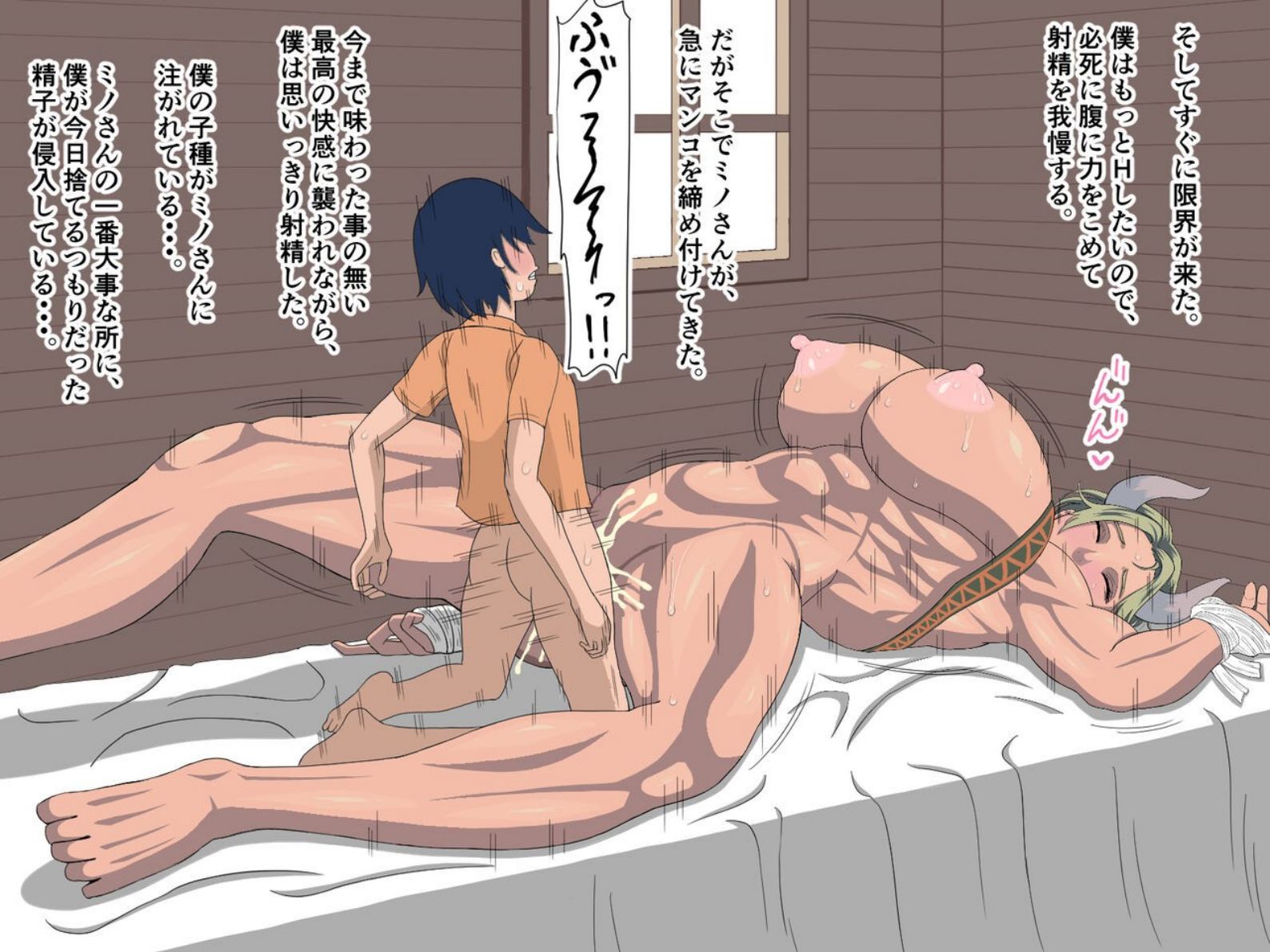
だがそこでミノさんが、
急にマンコを締め付けてきた。

ぶづろ〜んっ!!

今まで味わった事の無い
最高の快感に襲われながら、
僕は思いつきり射精した。

僕の子種がミノさんに
注がれている…。

ミノさんの一番大事な所に、
僕が今日捨てるつもりだった
精子が侵入している…。

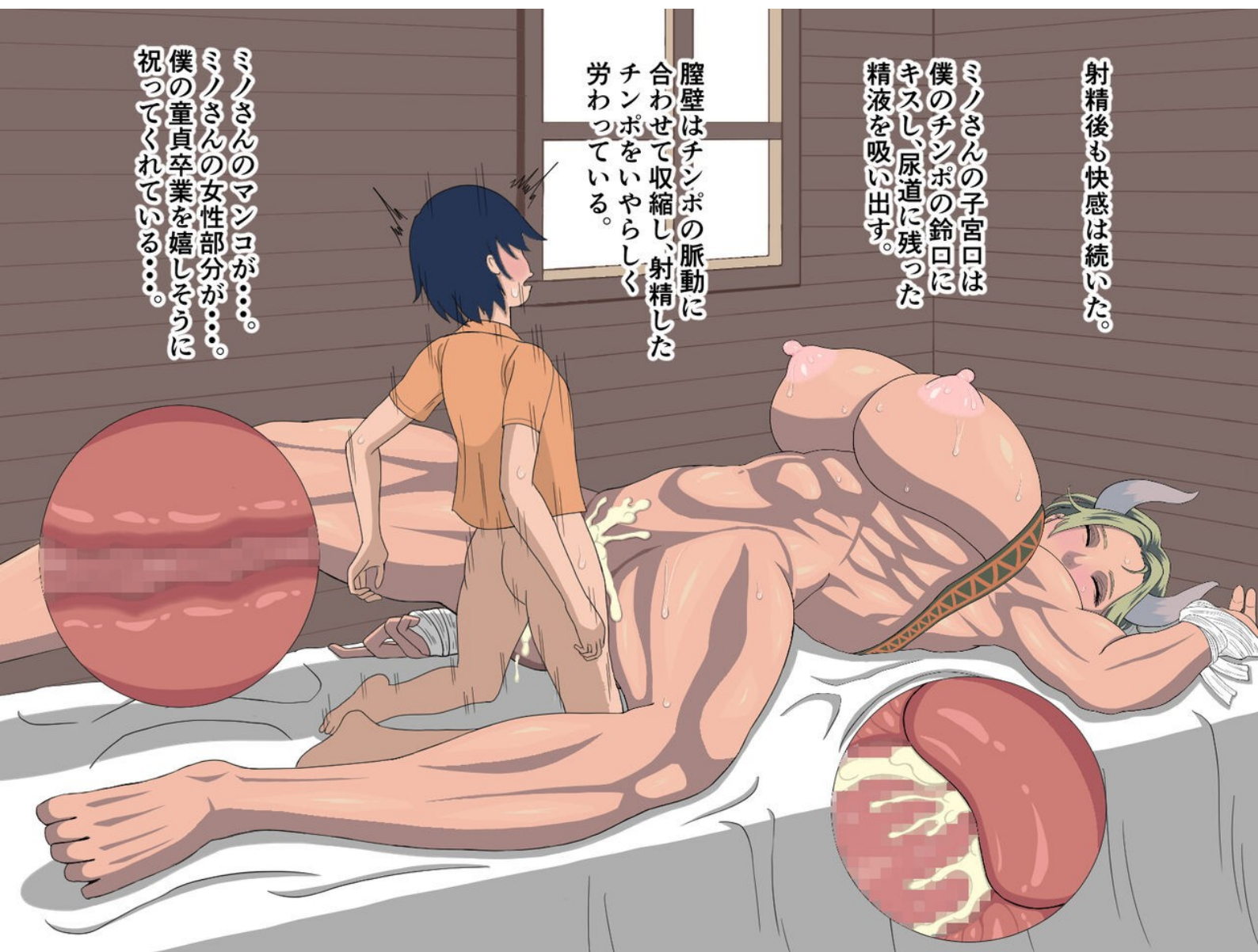


射精後も快感は続いた。

ミノさんの子宮口は僕のチンポの鈴口にキスし、尿道に残った精液を吸い出す。

膣壁はチンポの脈動に合わせて収縮し、射精したチンポをいやらしく労わっている。

ミノさんのマンコが……。ミノさんの女性部分が……。僕の童貞卒業を嬉しそうに祝ってくれている……。



それから僕は精通したばかりの
旺盛な性欲に身を任せ、
ミノさんを犯しまくった。

そして犯している内に何度も、
ミノさんが激しく膣内を
収縮させている事に気が付く。

これって確か、女の人がすごく
気持ち良くなった合図なんだっけ……。

ミノさんを僕のチンポで気持ち良くさせてる……。

まるで男としての全てが
肯定されている様な気がした。

それが嬉しくて嬉しくて、犯す片手間に
ミノさんが気持ち良くなる所を
沢山弄ってイカせてあげた。

多分10回はイカせたと思う。
その間に僕は13回イッた。

次は僕の倍イカせてあげたいな……。



一通り満足した僕は、
精液などを丁寧に拭き取り
ミノさんに服を着せ直した。

眠っていたので
ミノさんにはバレないと
信じたい……。

「ふあ〜寝たな〜。
あ？なんか腹が
変な感じする……」

「腹減ってっからかな？
かなり寝ちまったみたいだし」

良かった……。
ミノさんが小さい事を
気にしない性格で……。



僕が童貞を捨てた
あの日以降、
僕はミノさんに
手が出せずにいた……。

僕が来るたびに
眠気を感じたら、
流石に怪しむと
思ったからだ。

犯したい……。あの目沢山愛し合ったのに……。
ミノさんを犯したくても犯せない不満に、
僕は悶々とした日々を過ごしていた。

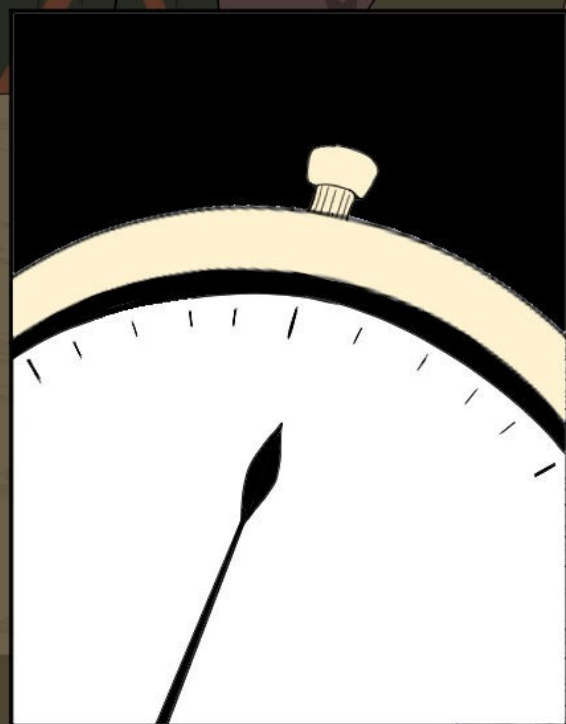


そんな時に僕は
時間停止時計という物を見つけた。

説明書きによると
時間を止める事ができ、
止まっている間他人は
何も認識できないらしい……

今の僕にピッタリの道具だと思った……

これで僕の存在を感じさせず、
ミノさんのエロい体を使い放題の
肉便器に出来るのだ……



時計のつまみを
目一杯回して押ししてみる。
すると風が止み
怖いほど静かになった。

ミノさんを見ると
まるで石像の様に
動かない……。

彼女の時間が
完全に停止
したのだ……。

僕は興奮しながら彼女の服を剥ぐと、
ミノさんのいやらしい恥部が露わになった。
薪割りの途中で止まったからか、
尻を突き出して挿れやすい姿になっている……。



おおおお!!
ミニッッ!!
ミニッッ!!

ミノさんのマンコで激しくチンポをしごく。
マンコの感触を味わうだとかそんな余裕は一切ない。
我慢していた分の鬱憤を放出するように、
自然と口調が荒くなった。



やだっー!!
だしたくないっ
だしたくない
のにいいいっ!!!

でも久しぶりのミノマンコはやっぱり気持ち良かった...。
僕はもつとHしていたのに、それをさせたくないのか
ミノは容赦なく快感を与えてくる...。
僕は段々ミノに腹が立ってきた。



でっでる!!
このっ...
ワソマンコ
めええええ

僕の好きなタイミングで射精させてくれない...
そんなミノへのイライラと共に大量の精液を吐き出す。
意識が無く、全くの無抵抗となったミノの子宮を、
久しぶりのご主人様ザーメンで溺れさせる。



ハアハアハア
ミノよ……
もっとマンコ
シめろよ!!

自分でも驚くほど射精したというのに、
ミノがエロいせいで全然満足できない……。
僕はムラムラさせられた責任を取って貰おうと、
足腰立たなくなるまでミノで性欲を発散した。



ふう……。
金玉が空になるまで
ミノさんで遊んだ僕は、
少し頭が落ち着いた。
なんだか
ミノさんに対して
色々失礼な事を
した気がする。

さて家に帰ろうかなと思った所で、時計の説明書きを思い出す。
『時間を解除すると、止めている間の感覚が一気に押し寄せる。
一気に感覚が押し寄せると、止めている間の感覚が一気に押し寄せる。
無邪気な好奇心に駆られた僕は、隠れて時間を解除してみた。』





ひゅっ!?

たれ

たれ



えっ??

えっ?!

はっ!?

これって---

ビクビク

ビクビク



うっ!!

ひびく!!

アッ

アッ

ひびく!!



イグ!!

イッイグ!!

あ!!あ!!あ!!あ!!

グッ

グッ

「いつ…
私犯されて…
どうやって…?」

はは
↓ ↓

ビク

ビク

凄いやつを見た…。大の大人の女性があんなに乱れるなんて…。
ミノさんは突然犯された事に気付きつつも、訳が分からない様子だ。
僕は自分の存在が気取られていない事に満足しつつ、
快感で気絶しかかっているミノさんを置いて帰路についた。



僕は今信じられない
光景を目に
している……

ミノさんが自分から
僕のズボンを下ろし、
ちんぽを顔に乗せて
くれているのだ……

ミノさんの柔らかい肌
がとても気持ちいい……
ただ乗せているだけで
フル勃起してしまう……



というのも、
実はジイちゃんの
魔法道具の
おかげだったりする。

『催眠スマホ』。
画面を見せる事で
対象の意識を乗っ取り、
意のままに操る事が
できるらしい。

今まで相手が動かない
Hをしてたから、自分から
動いてくれるミノさんは
新鮮で……とてもいやらしい……。

催眠



「な、舐めてミノさん……」

僕がそう指示をすると
ミノさんは何の
躊躇いもなく
僕のちんぽを
啜え込んだ。

「あ、ああ……♡」

?

?

ちゅ。ぽ。ちゅ。ぽ。

ミノさんのすぼめた口内が僕のちんぽを温かく包み、
柔らかい舌が生き物の様にちんぽを這い回る。

まんことは違った気持ち良さに、僕は腰が砕けかけた。

「ちよ、ちよっと待ってえ……」

ミノさんの口が
気持ち良すぎて
すぐ出そうになる。

僕はもっと
楽しみたかったので、
ミノさんに一旦止める様
指示した。

ミノさんはさっきまでの情熱的なフェラと打って変わり、
僕のちんぽを口に入れた状態でピタッと止まる。

それでも柔らかい口内の感触と温かい吐息が気持ちいい……。
僕はその快感に負けない様、必死に射精感を抑える。



射精感を抑えている間、
僕の中でとある欲求が
沸き上がってきた。

『ミノさんとコミュニケーションが取りたい…』

今までのプレイは全部
ミノさんからの反応が
無かった…。

それはそれで悪くは無いのだけど、折角ミノさんの言動を
操る事が出来るのだから、ミノさんから能動的な事をして欲しい。

なので僕はこうお願いしてみた。

「ママ…エロい事言ってえ」



「僕ちゃん、ママのお口気持ち良い？」

はあ♡

その言葉に僕の
下腹部が一気に
熱くなる。

「き、気持ちいいよママ……」
射精したい気持ちを抑えながら
必死にそう答える。

はあ♡

「フフ……ちんちんをイライラさせる
悪いミルクは、全部ママの口にコキ出すのよ？」

普段のがさつなミノさんからは、想像も出来ない程
甘くて母性に溢れたセリフ……
いやもしかたら普段は男らしく振舞ってるだけで、
ミノさんの女の部分はこれなのかもしれない……

「だ、ださせてママあ♡」

ママの淫語は
僕の我慢を
決壊させるのに
十分だった。

懇願するように
指示をすると、
ママがフェラを
再開させる。

ちゅぽ♡

ぐぽ♡

ぐぽ♡
ふぽ♡

それは今までの手加減したフェラではなく、
僕の精子を性欲ごと吸い尽くす様なフェラだった。

女が男を喜ばせるためにする事を、ママが僕のちんちんを
スッキリさせるためにしてくれる……

「ママー出るよお!!」

僕はとうとう我慢できず、ママの口に精液を吐き出した。

ん♡

ビュルルルル♡

ママの綺麗な口に、精液みたいな汚い物をユキ出している。その実感だけで、いつもより多く精液が出ている気がした。



「じゅる…じゅぽ…♡」

ママは僕が
射精した後も、
僕のちんぽを
愛してくれる。

じゅる♡

じゅるる♡

射精直後の敏感に震えるちんぽを舌で愛撫し、
尿道に残った精液も残すまいと一生懸命吸い出す。
その愛情たっぷりサービスの、金玉でぐっぐっ精液が作られる。



ママはひとしきり
僕から精液を
搾り取ると、
僕のちんぽを
顔に乗せ休憩させて
くれる……。

精液まみれの顔は
聖母の様に優しい気で、
射精して満足した僕を
愛おしそうに
見つめていた……。

その間もママは僕の精液をじっくり咀嚼しており、
射精して良かったと心の底から感じさせてくれる。

くちゅ♡

くちゅ♡



ママは僕の精液を
味が無くなるまで
味わうと、
勢いよく
それを飲み下した。

粘度の高い液体が
喉を伝う音が
大きく響く。

「ママに美味しいミルク
御馳走してくれてありがとうと
次はどの穴で遊ぶ？」

ゴキョー♡

ちんぽを舐めていたとは思えないほど良い笑顔で
そう言われ、僕はまたちんぽがバキバキになった。
次はママのおまんこに御馳走してあげたい……。



僕は次にママとおまんこエッチしようと思ったが、遺品の中にある物を発見する。

それは「あめすく」？
という物で、何の効果も無い
普通の服だった。

ただこれはママに
絶対似合う。。。

そう思った僕は
ママにそれを着るよう
お願いした。



「ふふふ、どう？気持ち良い？」

僕はママの巨乳過ぎる格好に無心で腰を振る。

あめすくを着たママは、まるでちんぼの事しか考えてない様な淫乱ビッチに見えて、普段のママとの対比から、僕の欲情にさらに火が付く。

「も〜ママにこんな格好させて…♡ どうしようもない変態なんだから♡」

困ったような甘い苦言。それを聞いた時、僕は怒りに満ち溢れた。



「お前のせいだ!!」

77!!

僕は怒りに任せて
勢いよくママの子宮口を
ちんぽでノックした。

ママは不意の快感に
びっくりしたのか、
間抜け声を上げながら
息子のちんぽを
ギュッと締め付ける。

んぼぼぼ



「全部ママが悪いんだ！」
僕の腰が早くなる。

「僕だってママにこんな
格好させたくない！」

「ママを犯したくない！」

「でもママがエロ過ぎる
のがいけないんだ！」

ママは自分がどれだけ
男を欲情させ、
精子を搾り取る
身体をしているか
分かってない!!

ん!? っく!!



「ママが責任取れよう！
僕をムラムラさせた
責任取ってえ！」

僕はママに反省して
欲しくて、怒りをこめながら
子宮口を乱暴に叩きまくる。

ママは無責任に
イキまくるだけだが、
まんこは反省の色を
示す様にうねり、
ちんぽを気持ち良く
してくれる。

イクッ！イクッ！！



「でっ出る!!
まんこで全部飲めえ!!」

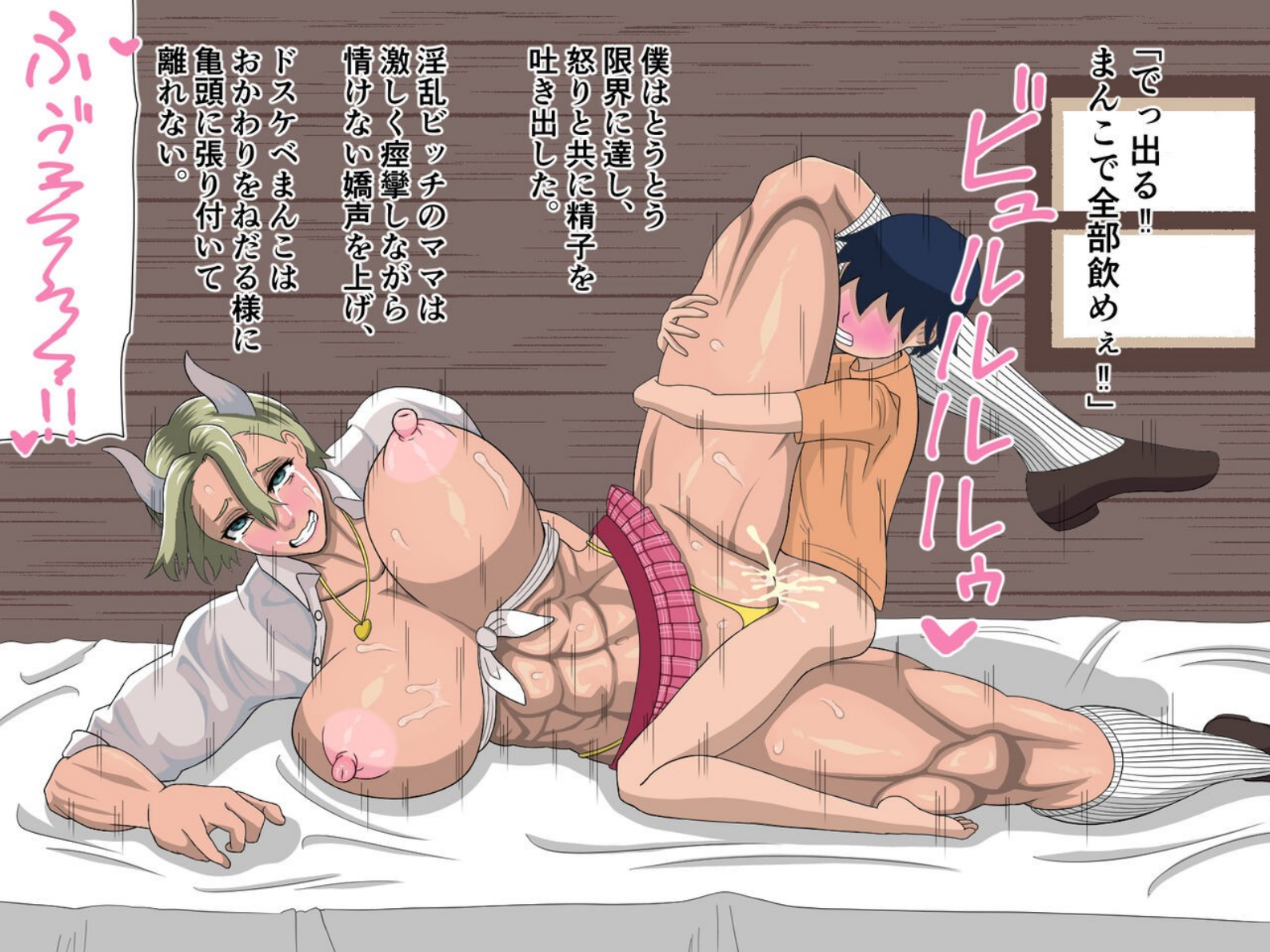
ビュルルルルッ

僕はどうとう
限界に達し、
怒りと共に精子を
吐き出した。

淫乱ビッチのママは
激しく痙攣しながら
情けない嬌声を上げ、

ドスケベまんこは
おかわりをねだる様に
亀頭に張り付いて
離れない。

ぶぐぐぐぐぐ!!



「ゴ、ごめんね……。そうよね。ママがちんちん大きくさせちゃったんだから……。ママが沢山気持ちよくしないかね……。♡」

グチュ♡
スチュ♡
ドチュ♡

「うん！だからもっとママのおまんこ使わせてね！」

「う、うん」

「ママが泣いて気絶しても、ずっとおまんこズポズポするよ！」

「う……。うん……。ちんちんの気が済むまで、ママのおまんこで遊んで……」



それから一時間程、
僕はママのまんこで
遊びまくった。

ママはほぼ白目を剥いて
失神しかけているが、
ムラムラが治まらないので
中々おマンコ遊びが
止められない。

まあでも全部ママが
エロいのが悪いよね。

男好きのする身体で……
しかもこんな
エロい格好までして
僕を誘惑してるんだから。



「ママ！
おまんこ緩んできたよ！
こんなクソまんこじゃ
気持ち良くなれないよ！」

僕は意識が朦朧としている
ママに叱咤する。

「まんこ顔してないで
ちゃんと反省して！
ママがちゃんぽ大好きな
精液専用便女な事を、
クソ雑魚まんこで
僕に謝って!!」

僕はそう言うと、
呻き声を上げる様に

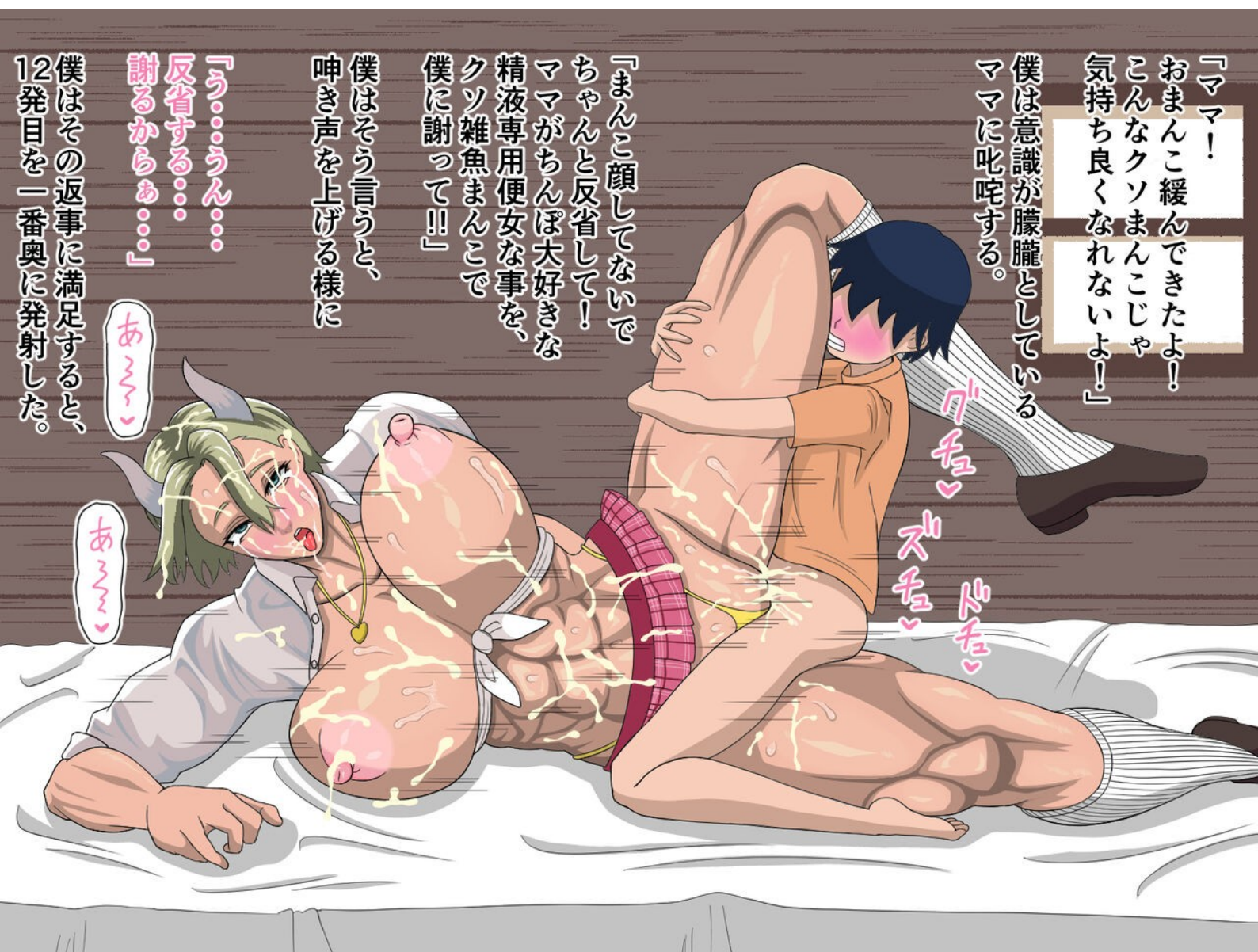
「う…うん…
反省する…
謝るからあ…」

あ〜

あ〜

グチュ♡
スチュ♡
ドチュ♡

僕はその返事に満足すると、
12発目を一番奥に発射した。



僕は今、ミノさんに攫われて
尋問を受けている……。

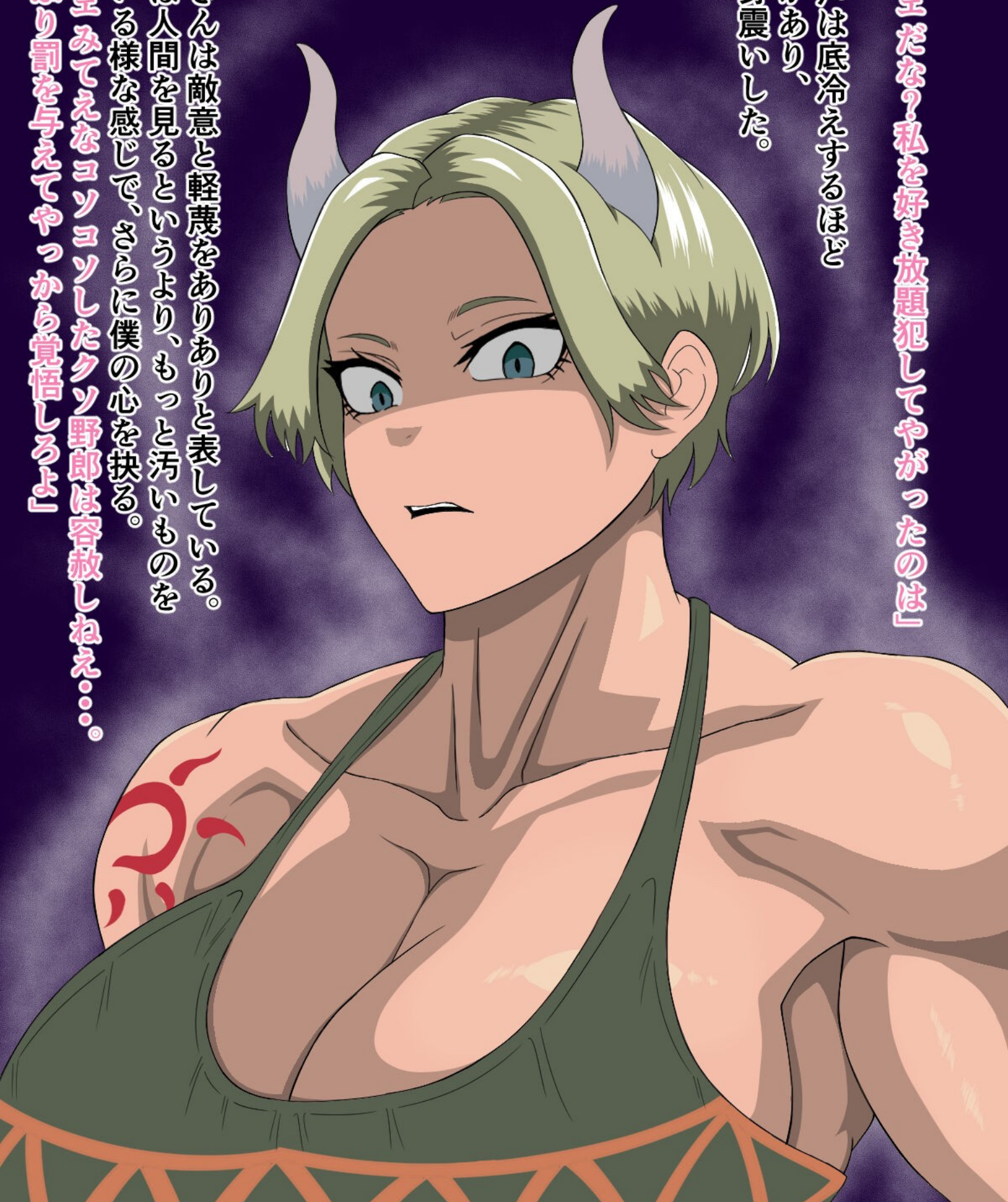
どうやら今まで僕が
ミノさんにしてきた事が
バレてしまったらしい……。



「テメエだな？私を好き放題犯してやがったのは」

その声は底冷えするほど
迫力があり、
僕は身震いした。

ミノさんは敵意と軽蔑をありありと表している。
それは人間を見るといふより、もっと汚いもの
を見ている様な感じで、さらに僕の心を抉る。
「テメエみてえなコソコソしたクソ野郎は容赦しねえ……
たっぷり罰を与えてやっから覚悟しろよ」



ミノさんはそう言った直後、
アナル舐めパイズリを
始めた。



逃げない様大きな胸で
ちんぽをガツシリ掴まえ、
真剣な顔で僕のアナルを舐めている。

それもミノさんが自分の意思で
やってくれているのだ...

「おら！動くんじゃねえ！
ケツ穴舐められねえじゃ
ねえか！」

クチュ♡

クチュ♡

「ご、ごめんなさい……！」
僕は大人しく尻の穴を差し出す。
この世界で女の人を犯したら、
女の人から犯されるのが罰だ。
だからこれは当然の責め苦なのだ。



というのは冗談で、
これは催眠の一つである
「常識改変」のおかげだ。

以前の催眠のオプションで、
対象の常識を変えることが出来るのだ。

今回ミノさんには、
「女を犯した男は女に犯されることで、
その罪の重さや苦しみを味あわなければならぬ」
という常識を与えている。
つまりこのアナル舐めパイズリも、
ミノさんには常識なのだ。



ミノさんのアナル舐めは
丁寧で情熱的だった。

ズチュ

ジュル

ジュルルル

あ……

う……

アナルの皺を一本一本
磨き上げるように舐め、
穴に直接舌を入れ込んでケツ汁を
何の躊躇いも無く吸い上げている。

こんな極上の性処理サービスを、
罰を与える名目で真剣に
やってくれるのだから笑える。



ミノさんのご奉仕があまりに
気持ち良すぎて、僕のちんぽが
ひくひくと脈打つ。

それを感じ取ったミノさんは誇らしげに
「へへへ。そうとう参ってきたようだな。
レイプ魔にはこれが一番効くんのだ」

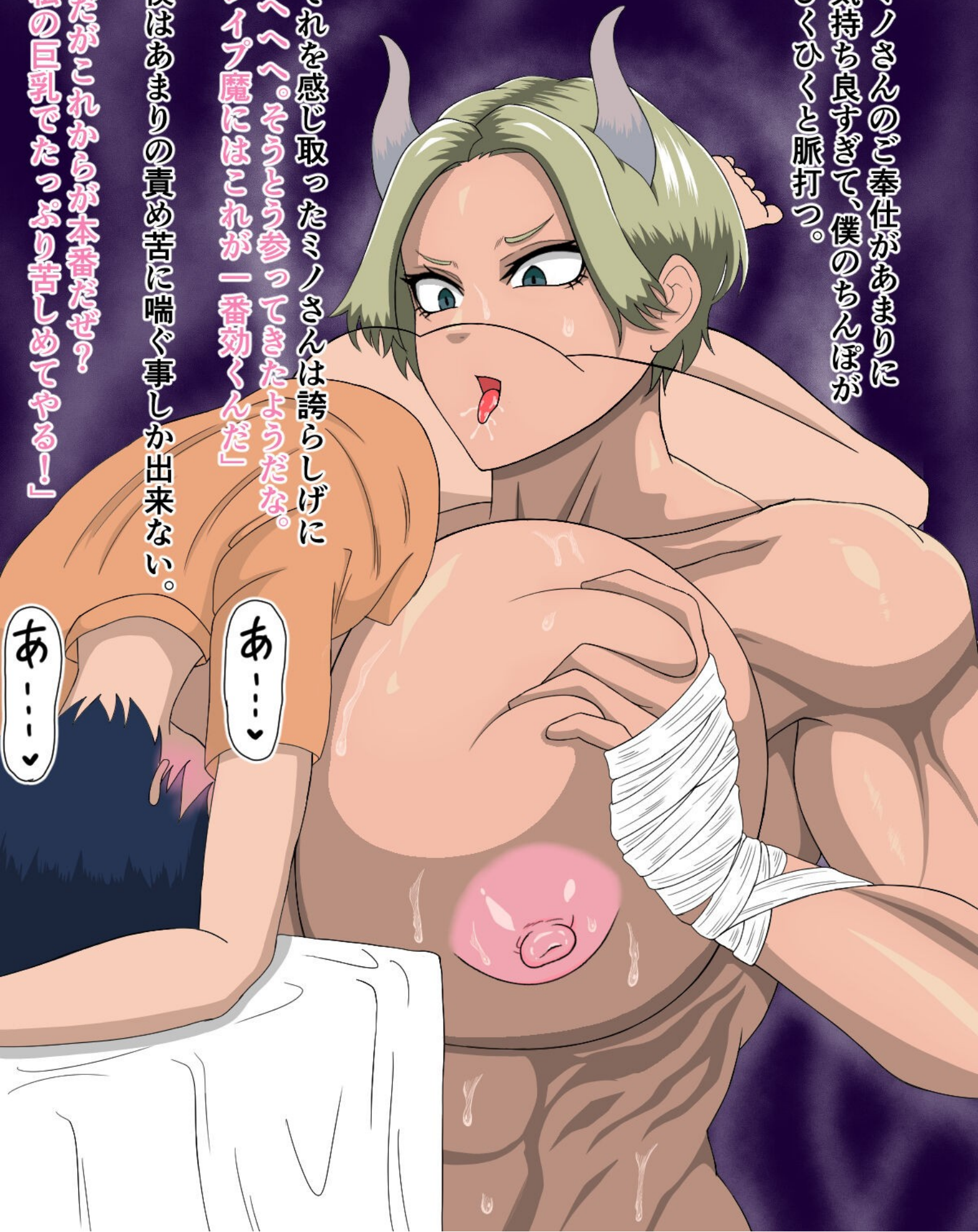
僕はあまりの責め苦に喘ぐ事しか出来ない。

「だがこれからが本番だぜ？」

私の巨乳でたっぷり苦しめてやる！」

あ……

あ……



「おら！気持ちいだろう？」

「イケ！イケ！」

ミノさんがパイズリの速度を上げる。

「女にケツ舐められながら、

無様に精液無駄撃ちしろ!!」

ミノさんのおっぱいは蒸れ蒸れで、

まんことはまた違った感触で

僕のちんぽを楽しませてくれる。

おまけに女性にアナルを舐めさせている

非日常が、僕を簡単に限界に導いた。

あ……

あ……



僕は思いっきり射精した。
はっきり言って今までで
一番興奮したと思う。

尻穴にハマった舌を逃がさない様、
足でミノさんの頭を固定する。
その感触を味わいながら、
柔らかくて弾力のある胸に
射精するのは最高の体験だった。

イク!!
イク!!!







ああ!!

チュポ〜

「女みてえな声上げて
胸まんこに射精しやがって。
情けねえ」

ミノさんは僕のアナルから勢いよく舌を抜くと、
ニイっと不敵に笑って見せた。

「私が受けた恥辱はこんなもんじゃねえぞ!!」

足腰立たなくなるまで射精させて、

私を犯した罪を思い知らせてやる!!」

僕はその言葉を聞き、

ちんぽが硬くなるのを感じた。

はっはい……



「どうだ？私のマンコ
気持ち良いだろう？」

必死に腰を振る
僕にミノさんは
そう尋ねる。

常識改変されたミノさんは
次はおまんこで僕に罰を
与えたいらしい。
ただ今の僕にとっては、
開発済みの使い勝手の良い
おまんこでしかなく、
少し退屈になってきた。




「ご、ごめんなさい……
許してえ……」

そう言うと
彼女は意地悪く
笑った。

「ダメだね。
テメエは好きでもねえ女に
無理矢理レイプされながら
無様にイクんだよ!!
ほら! 筋肉女の肉厚まんこに
とっとと精液ぶり撒げや!」





ミノさんが
いつもの口調で
卑猥な事を言っても
僕は全然
興奮しなかった。

まあでも
それも仕方ない。

今まで散々ミノさんの
まんこを味わい尽くしたのだ。
単純に飽きてきたのだろう…。

と、そこで僕はふと思った。
「この状態で意識だけ
催眠解除したらどうなるんだろう？」

僕は好奇心の赴くまま、
ミノさんの意識だけを
催眠解除してみた。

「テメエは一生
私の性奴隷として
使ってや……」

え……

さっきまでの威勢はすぐに
消え去り、ミノさんは一瞬
混乱した様な表情をする。
そして徐々に自分の今の
状況を把握し始めた。

いつのまにか男に
犯されているという状況を。



「なっ、おいお前…
何して…」

そこで彼女は
全てを理解した
らしい。

「嘘だろテメエ!?
やめる…! やめろお!!」
ミノさんは顔を引きつらせ、
恐怖に染まった声音で怒鳴った。

その催眠のかかってない
ミノさんのリアルな感情に、
僕は今までに無い興奮を感じた。



「クソ...！なんで身体が
動かねえんだよ！
おい退けよ！腰振んな！」

「なんで？ママが僕を
レイプしてるんだよ？
思い出して？
ママが僕にしてくれた事」

ママの表情が
段々と
青ざめてくる。

ママは今まで自分が
されてきた事を思い出した
のだろう。
その絶望感を伴った顔を
見ていると、もっとママを
虐めたくなってきた。



「クソ……クソ……!!
テメエまじで
ぶっ殺してやる!」

「なんで?
ママをこんなに
気持ち良くして
あげてるのに!」

「誰がテメエのママだよ!!
気色悪いんだよクソが!!」

フー!!!

ママの反抗的な態度と、
ちんぽを追い出そうとする
まんこの締め付けに
僕は腹が立ってきた。
これはきつちり馴けなきゃ……



「殺すって
どうやってえ!!」

僕はママの
お気に入り
の子宮口ド
チュドチュ
をしながら
叫んだ。

おほおほ♡

どちゅ♡

ママはまんこでひり出した様な
間抜けな喘ぎ声をあげながら、
まんこを収縮させてご主人様の
ちんぽに目一杯甘える。

頭では強気ぶってるけど、
まんこはどこまでも正直だ。



「こんな少し
小突いただけで
良い子になっちゃう
クソ雑魚まんこで
どうやって僕を殺すの!？」

ママの
まんこを
突きながら
言う。

ぞぞ!!

ぞぞぞ♡

「僕のちんぽ見ただけで
子宮が降りてきちゃう癖に
どうやってえ?
ねえ教えてママ」

改造され尽くしたまんこは
強烈な快楽をママに与え、
まともに喋る事すら許さない。



「ああああ！やばい！
そろそろ出る！
ママの子宮で精子
遊びたがってるよお!!」

「やだ！
やめてえ！」

「今出されたらっ」

僕のちんぽが限界を迎える。
使い慣れたまんこと言えど、
ママは息子の精子を
逃がしたりしないのだ。

ママは何か言ってる気がした。
「早くう♥」「いっぱい出して♥」
とかそんな所だろう。



「出る！濃いが出る！！
イってママ！
僕と一緒にイケ！！」

ビュルルルル

ガガガ

僕はママのまんこに
精液をぶり撒いた。
Hに慣れた僕はあんまり
気持ち良く無かったけど、
ママは嬉し泣きしながら
子宮で精液を嚙下しているの
でああ射精してやって
良かったかな？と思った。



それから数時間
僕は種付けしまくった。
いくら抵抗しても、ママは
マンコで僕の性処理を
するしかないのだと
教える様に。

あーあ

おっおっ

「もうイクのやだ……
気持ち良いのイヤ……」

「ダメだよ。ママはもう

僕専用の性欲サンドバック

兼ミルクサーバーなんだから。

おまんこもおっぱいも

ずーっと気持ちいままだよ」

そう言うとママは一瞬だけ声も出さず泣いた。



んんっ!?

んっ!

それから数か月間。
僕はママを沢山可愛がってあげた。

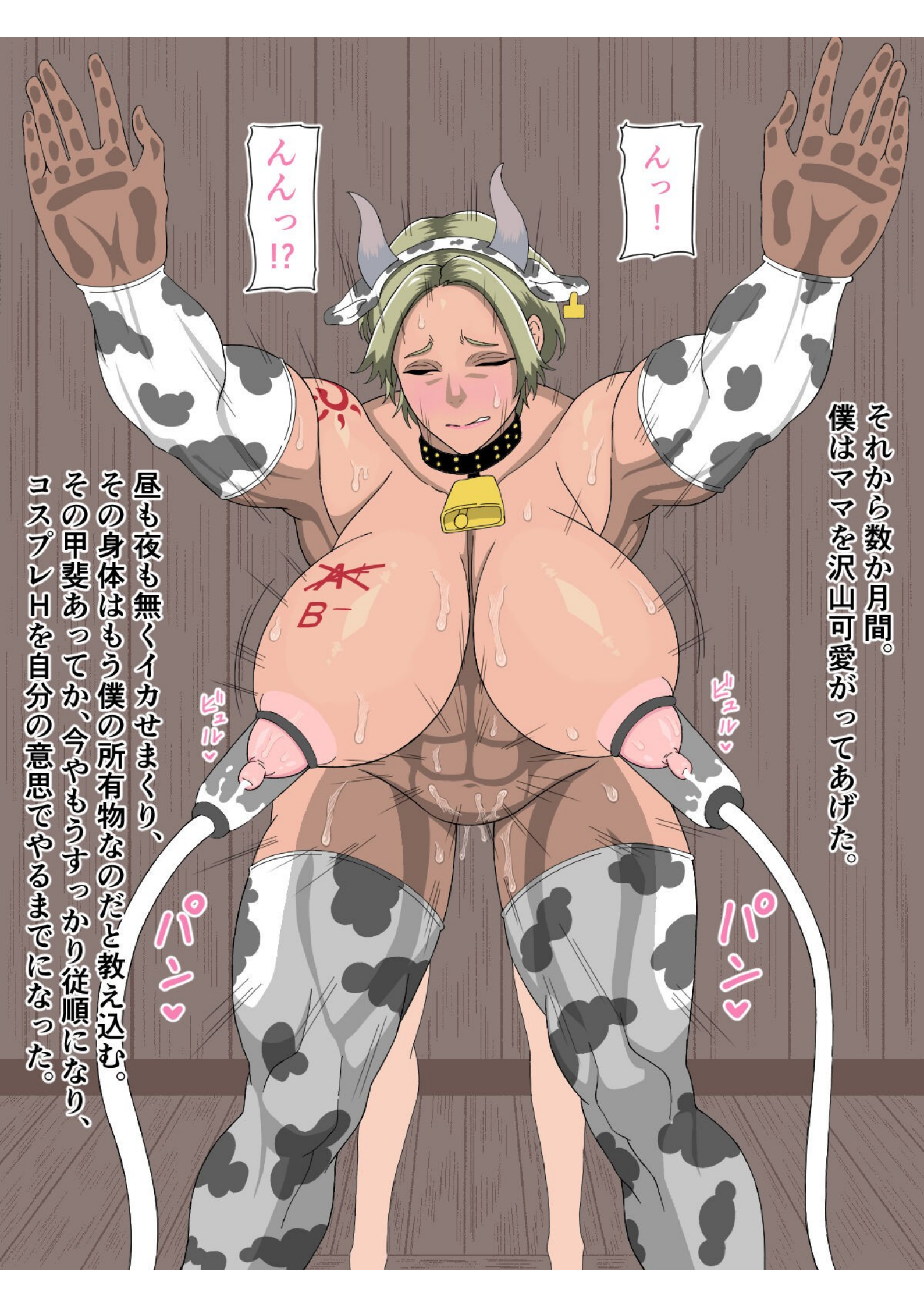
昼も夜も無くイカせまくり、
その身体はもう僕の所有物なのだど教え込む。
その甲斐あってか、今やもうすっかり従順になり、
コスプレHを自分の意思でやるまでになった。

ビュル♡

ビュル♡

パン♡

パン♡



ごっ……
ごめんなさい

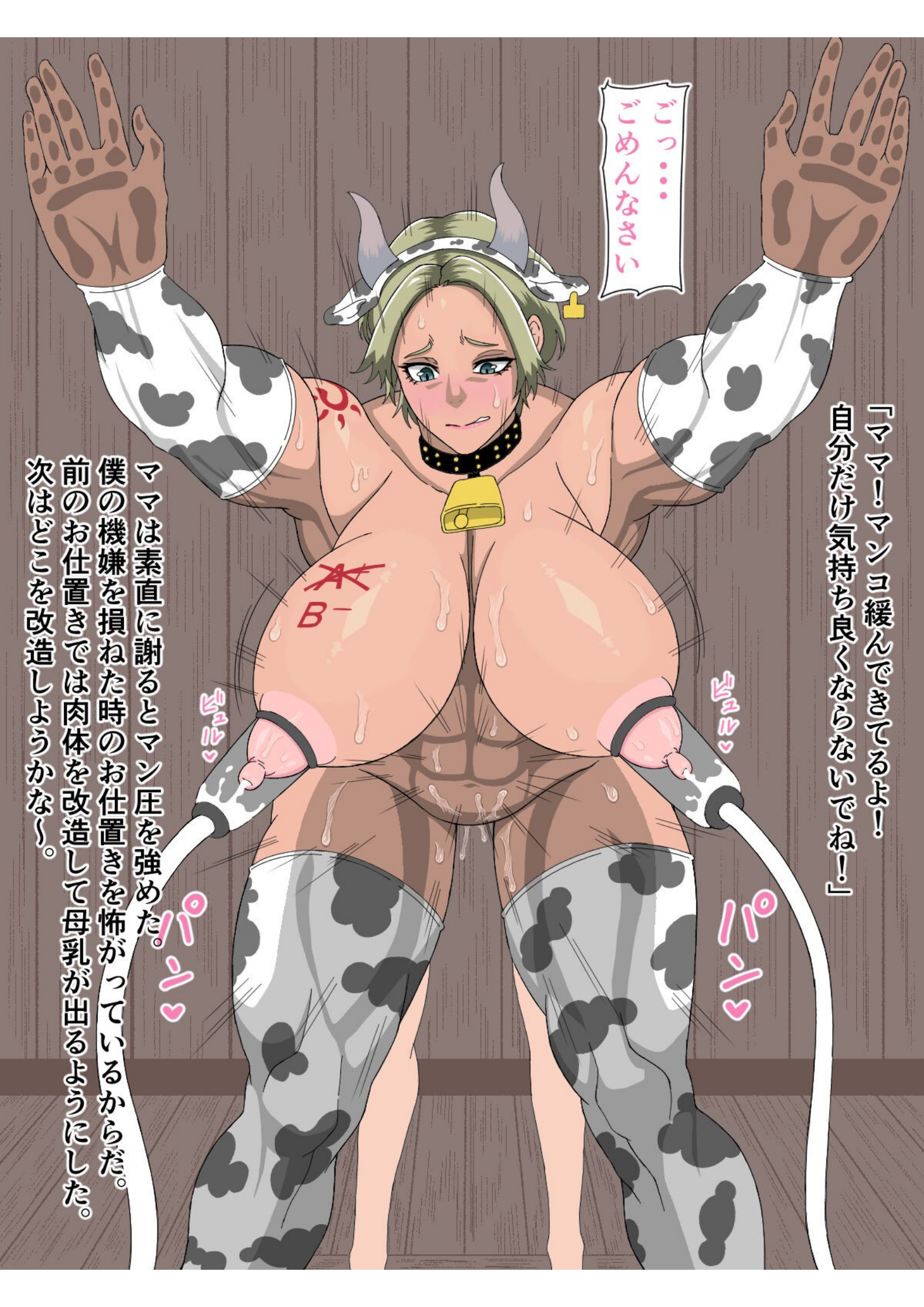
「ママ！マンコ緩んできてるよ！
自分だけ気持ち良くなるらないでね！」

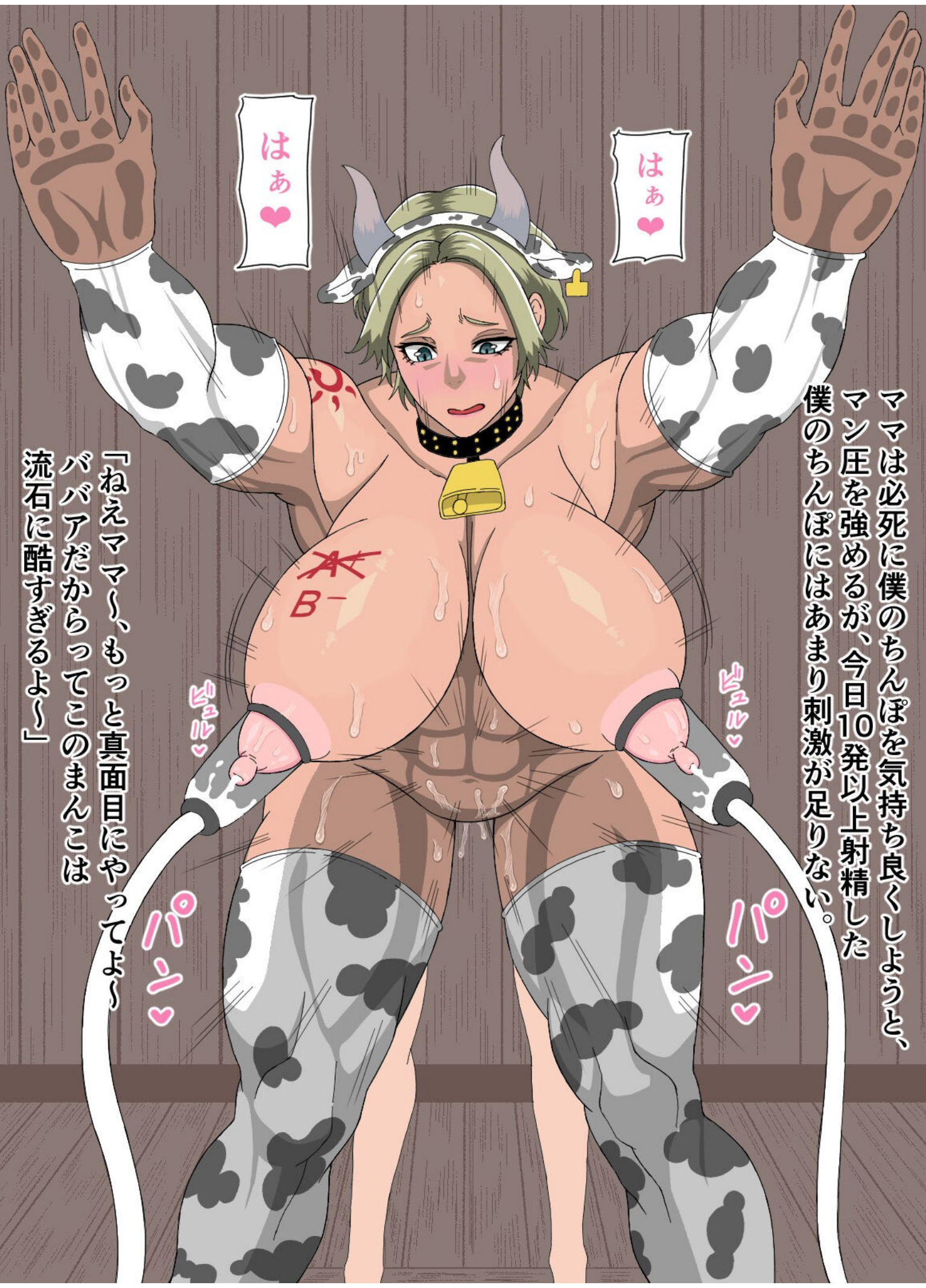
ママは素直に謝るとマン圧を強めた。
僕の機嫌を損ねた時のお仕置きを怖がっているからだ。
前のお仕置きでは肉体を改造して母乳が出るようにした。
次はどこを改造しようかな。

ピュル♡
ピュル♡

ピュル♡

パロ♡
パロ♡





ママは必死に僕のちんぽを気持ち良くしようとして、マン圧を強めるが、今日10発以上射精した僕のちんぽにはあまり刺激が足りない。

「ねえママ、もっと真面目にやってよ。ババアだからってこのまんこは流石に酷すぎるよ。」

はあ♡

はあ♡

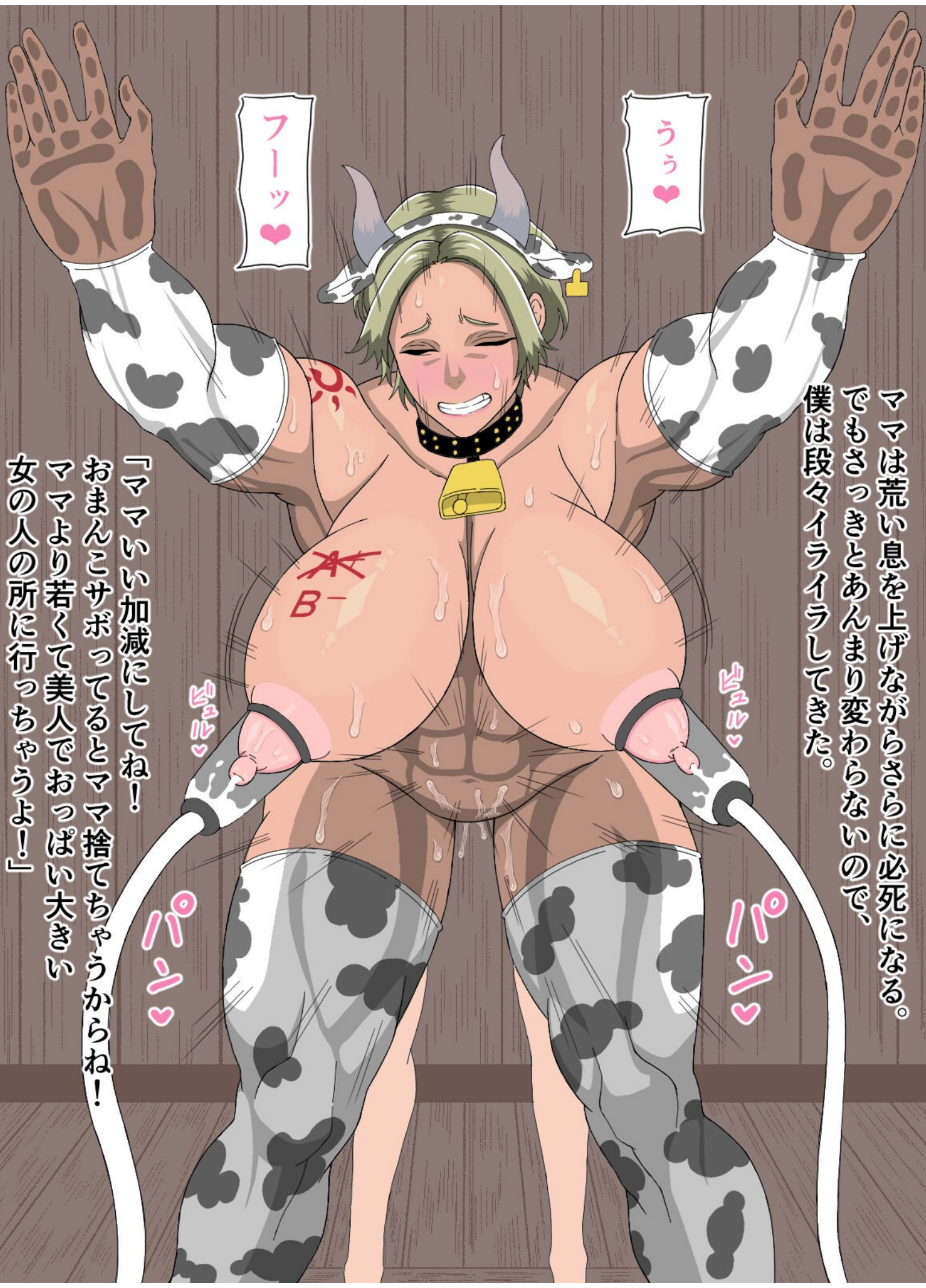
~~A-~~
B-

ビュル♡

ビュル♡

パロ♡

パロ♡



ママは荒い息を上げながらさらに必死になる。
でもさっきとあんまり変わらないので、
僕は段々イライラしてきた。

「ママいい加減にしてね！
おまんこサボってるとママ捨てちゃうからね！
ママより若くて美人でおっぱい大きい
女の人の所に行っちゃおうよ！」

フーツ♡

うう♡

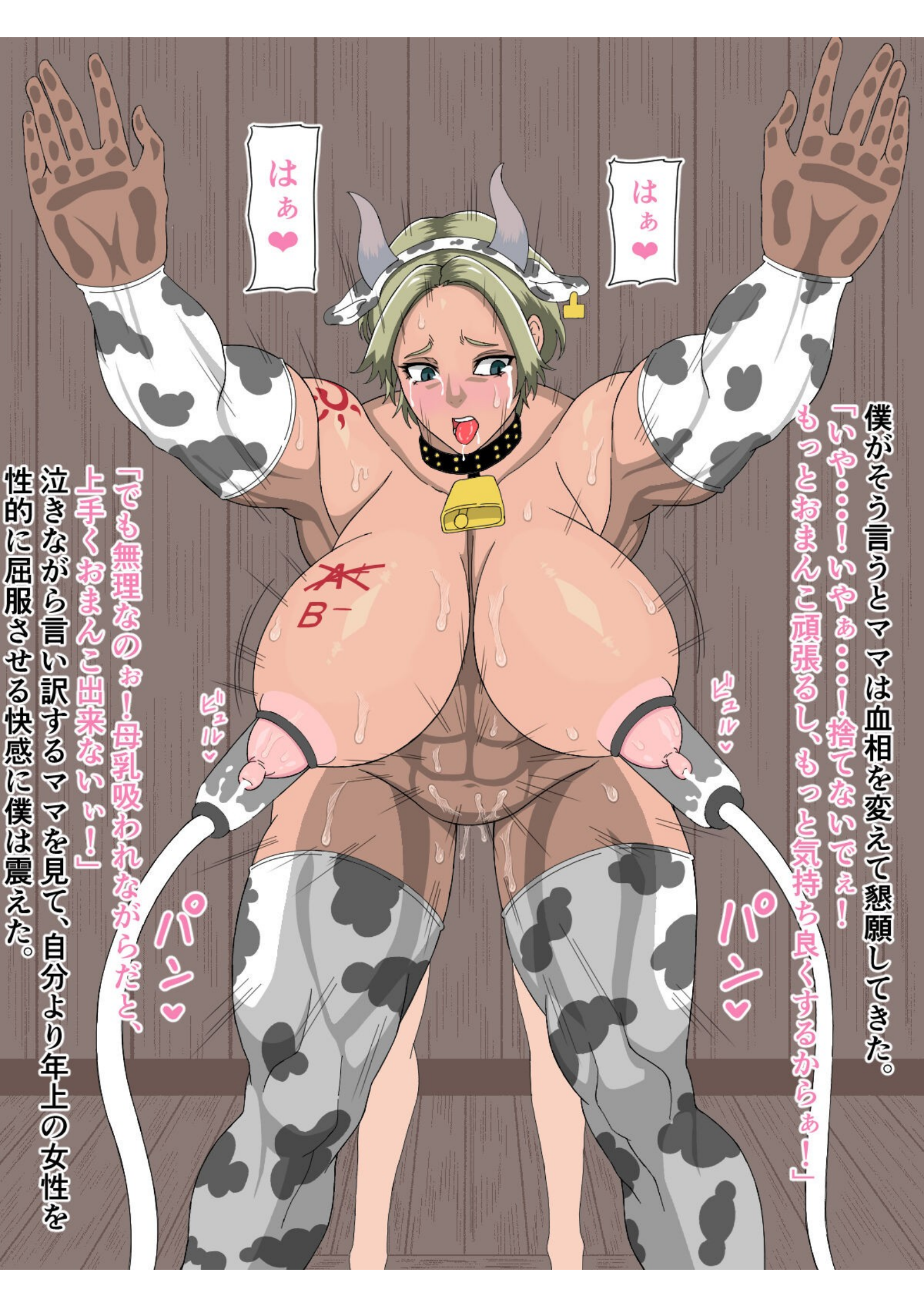
ピュル♡

ピュル♡

パン♡

パン♡

~~A~~
B-



僕がそう言うのとママは血相を変えて懇願してきた。

「いや……いやあ……！捨てないでえ！」

もっとおまんこ頑張るし、もっとおまんこ頑張るからあ！」

はあ♡

はあ♡

ピュル♡

パン♡

ピュル♡

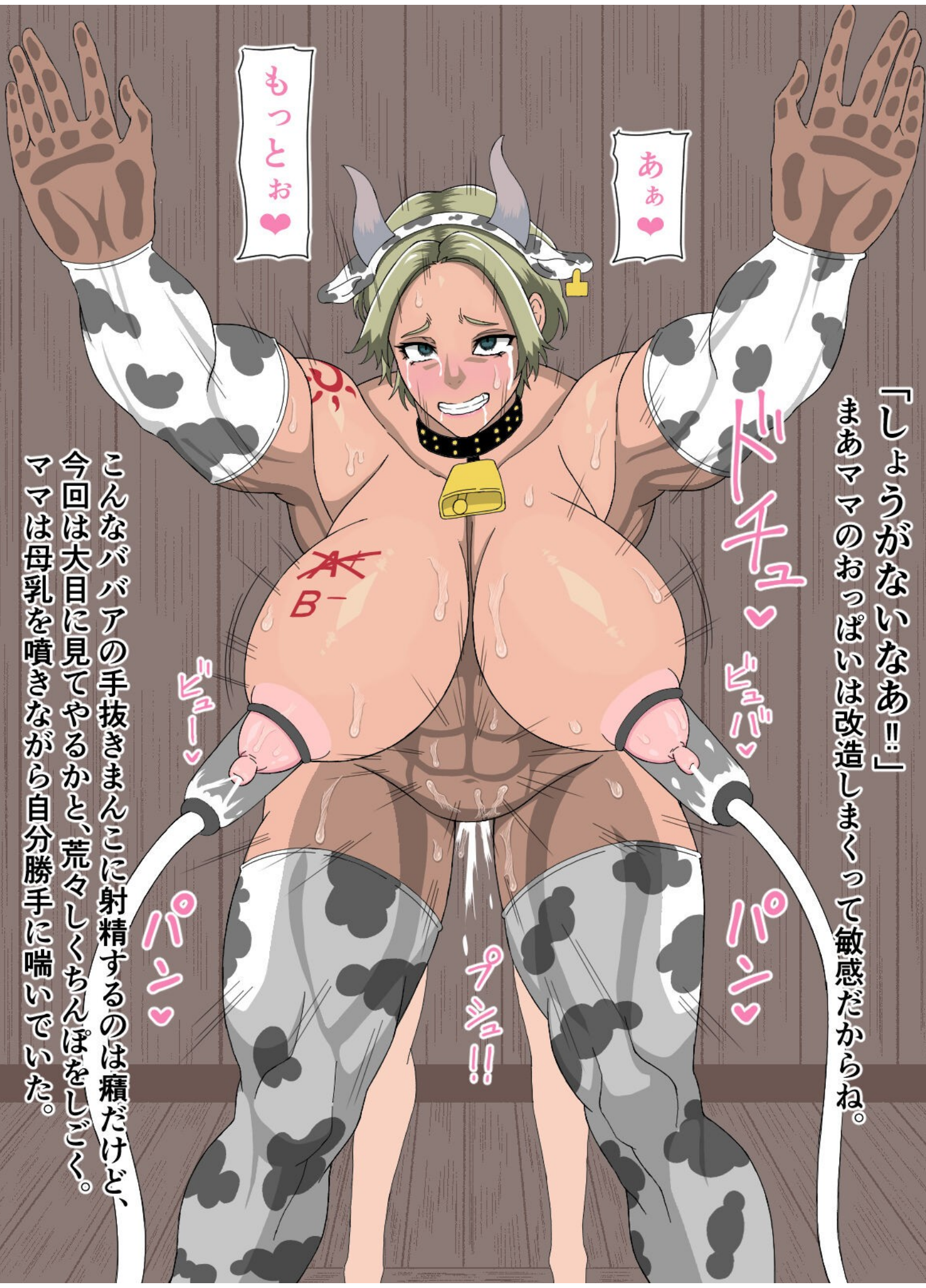
パン♡

「でも無理なお！母乳吸われながらだと、

上手くおまんこ出来ない！」

泣きながら言い訳するママを見て、自分より年上の女性を

性的に屈服させる快感に僕は震えた。



もっとお♡

ああ♡

「しようがないなあ!!」
まあママのおっぱいは改造しまくって敏感だからね。

こんなババアの手抜きまんこに射精するのは癪だけど、
今回は大目に見てやるかと、荒々しくちんぽをしごく。
ママは母乳を噴きながら自分勝手に喘いでいた。

ドチュ♡

ビュッ♡

パン♡

パン♡

プン!!

イキます♡

イクっ♡

「ああ、出る！出ちゃう!!
ママに犯されて精液搾られちゃう!!」

僕の腰が一層早くなり、ちんぽが痙攣を始める。
ママは僕が気持ち良く射精できるように、
子宮口を降ろし絶頂する準備を整える。

ドキュ♡

ビュッ♡

パニ♡

パニ♡

プン!!



「出てるう！」

僕の精液ママのゴミ箱まんこに出てるう！！」

ビュル

ブルブル
ブルブル
ブルブル

おっぱい
おっぱい

お尻

今日一番の濃い精液がママの子宮に飲み込まれる。
ママは母乳を沢山噴き出しながら快楽に身体を震わせた。
その震えがちんぽを刺激し、射精を更に長いものにさせた。



「全く。許すのは今回だけだからね！
ほら！呆けてないで母乳パイズリして！」

「うん、するう♡
するから…ママのおまんこずっと使ってね♡」

ポタ♡
ポタ♡



こうして僕はミノさんを完全に女として墮とし、
ママにすることに成功した。

こんな事が出来たのも、全部ジイちゃんのだ具のおかげだ。
しかも道具はまだ色々種類があり、これらをママに使って
あげるのが楽しみでしようがない

でもその反面、ミノママにだけ性欲を消費するのが
勿体ないと感じている自分がある……

だってこの道具達があれば、どんな女でも僕のママに出来るのだ。
それなら色んな女たちを味見して僕に相応しいママを描えたい……

あとは単純にミノママの身体に飽きてきたから、別の女で味変したいしね。

次はどんな女をママにしようかな？